

高津新田のカラスビシャ

高津新田は現在八千代台と呼ばれている地区の大半で、江戸時代の延宝4(1676)年に成立したムラです。オビシャの的にカラスが描かれていることからカラスビシャと呼ばれています。元々は2月10日におこなわれていましたが、現在では翌11日に行われるようになりました。八千代台西にある諏訪神社で行われます。

当日は9時頃に神社に氏子等が集合し、人が集まったところで、神社本殿前で式典を行います。近年は式典に先立ち太鼓の奉納演奏が行われています。式典終了後、神社脇に集まり、弓射神事を行います。氏子総代が始めに射した後、来賓や氏子等、出席者全員が弓を射ます。全員が射終わると、当番の1人が矢を手にもって、的にカラスの目を突き刺して、弓射神事が終了します。

弓射神事の後には直会の会場である高津新田西集会場の前にある御嶽神社に参拝し、直会に移ります。平成29年からは高津新田西集会場が道路の拡幅によりなくなってしまったため、高津新田公会堂へと直会の会場を変更しました。これにより、いままでとは逆の方向に移動

おびしゃの起源

おびしゃの起源は定かではありませんが、日本では古代から弓射行事が行われています。古代中国から日本に伝わり、宮中で行われていた射礼は、『日本書紀』清寧天皇四年(483年)九月一日の記述を最古に、天武天皇(672-686)の頃には毎年1月17日に「射礼」あるいは「大射」が行われた記述があります。

また、埼玉県東松山市高坂の反町遺跡¹⁾からは、9世紀の木製の柄に二股に分かれた雁股鎌といわれる鎌をつけた矢3本と、矢の散乱する中間地点で、竹で編んだ平たい形状をしたザルが出土し、オビシャの的に矢ではないかと考えられています。また、近くの川岸跡には「神矢」「弓」などと書かれた墨書土器が一定間隔で並べられた状態で出土し、平安時代に弓での的

しなければならぬため、御嶽神社への参拝を事前にすませるようになりました。

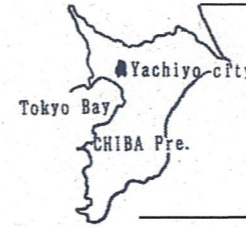
直会が始まりしばらくすると、御神体を受け渡す「オトウワタシ」が行われます。「オトウワタシ」はもともと直会の最後に行われるものですが、最近は見学者などが増えたことから直会が始まってしばらくすると行われます。

真ん中に座った世話役が今年のヤドに「ごころうさま」と言いながら御神酒を注ぎ、今年のヤドの2名はこれを飲み干します。続いて来年のヤド2名が御神酒を飲み干します。飲み干した後に来年のヤド2名は今年のヤドの頭を、塩をつけた大根でこすります。続いて今年のヤド2名が来年のヤド2名の頭を、塩をつけた大根でこすり、今年のヤドのカシラ(御神体を預かる人)が来年のヤドのカシラの背にオトウを差し込みます。ヤドのカシラはそのまま家に帰りオトウを神棚に祀ります。(現在は直会の途中でオトウワタシを行うため、オトウを手を持って帰る場合もある)。午後からは女性の集まりになり、この最後にハッセと呼ばれる祝い唄が唄われます。

射る神事が行われていたのではないかと考えられます。¹⁾埼玉県埋蔵文化財調査事業団2009「反町遺跡」

高津のハツカビシャ・高津新田のカラスビシャがいつ始まったのか明らかではありませんが、高津では、過去の調査で御神体の包みが開けられ、包まれていた木箱の中に宝永8(1711)年の「高津大明神奉社帳」と元文二(1737)年の「高津大明神奉社当番覚帳」の2冊が納められており、少なくとも1711年にはオビシャが行われていることがわかっています。高津新田は、このような資料が残ってはいませんが、1676年に成立したムラであることから、それ以降に始まったと考えられます。

編集・発行：八千代市教育委員会教育総務課文化財班
〒276-0045 八千代市大和田138-2
電話 047(481)0304



たから
財やちよ

財市八
通文千
信化代
No. 3
2018. 1. 15
(平成30年)

八千代市指定文化財

高津のハツカビシャ・高津新田のカラスビシャ

八千代市文化財には2件のおびしゃが指定されています。「高津のハツカビシャ」と「高津新田のカラスビシャ」です。おびしゃとは主に新春に行われる行事で、一年の始め、あるいは農耕開始に際して産土様(ウブスナサマ・オボスナサマ)を呼び寄せて宴を催し、一年間にわたって産土様のお世話をする当番を受け渡す儀式を行うとともに、弓での的を射る神事を行い

高津のハツカビシャ

市内高津地区にある高津比咩神社で行われます。毎年1月20日におこなわれることからハツカビシャと呼ばれています。「ナカムラ」「シンデン」「ミナミ」「ニシ」と呼ばれる4つのニワ(地区)で、順番にハツカビシャの当番を受け持ちます。

準備は前日の19日に行われ、弓・矢・的を宮世話人が中心となって作り、当番のニワが神社内外の掃除や、当日の料理の準備等を行います。

的は直径90cm程に竹を籠目に編んで半紙を張り、周辺を黒く塗り、中心に毘という鬼のような字を描きます。この文字の覚え方として「甲・乙・ム(無)(こうおつなし)」といい、豊作でも凶作でもなく中ぐらいがよいとされています。的の支柱は、皮をはいだヌルゲの木(二股)になっている箇所を使います。弓は皮をはいだ桑の木で、麻糸を撚って弦とします。

当日は前日に作った的を境内の鳥居の手前

ます。弓を射るのは、その結果を持って一年を占う行事とも、新しい年の天候の順調であることを願い、豊かな実りを祈願する神事ともいわれています。おびしゃには「御歩射」などの字を宛て、武士が流鏑馬などの「騎射」を行うのに対し、農民が徒歩で弓を射るので、「歩射」ともいわれますが、他にも「奉社」「毘射」「備射」「日射」など様々な字が宛てられています。

に立てます。午後1時頃から神社拜殿で式典を行った後、弓射神事が行われます。初めに神主が射て、高津自治会特別委員会の委員長・副委員長・当番のニワの人・来賓・宮世話人ら1人1本ずつ計13本の矢を射ます。元々は12本、閏年には13本の矢を射ていたことから、1年の月と関係があると考えられます。

弓射神事が終わると、中央に宮世話人が座り、拜殿入口から向かって右に当番のニワ3名(御神体を預かるヤド1名と見届け人2名)と左に次の当番のニワ3名が座り、次の当番へと御神体を受け渡し、御神酒を飲み交わします。これをオトウウケトリと呼んでいます。オトウウケトリの後は高津自治会館へ移動し直会となり、入れ替わりで神社には念仏講の女性たちが集まってオビシャの花見(祝い唄)を歌います。しかし、近年念仏講が解散したことから、当番のニワの女性たちが花見を歌います。

高津のハツカビシヤ

① 式典



午後1時に当番や次の当番のヤド、宮世話人、高津自治会特別委員会の役員等が集まり、神主により式典が執り行われます。

② 弓射神事



神主が初めに弓を射た後、高津自治会特別委員会役員、来賓、当番、宮世話人等が弓を射ます。射られた矢は、無病息災のお守りになるため、争って取り合います。

③ オトウケトリ



当番のヤドから次の当番のヤドへのご神体（オトウ）の受け渡しを行います。中央の宮世話人がお酒を注ぎ、新旧の当番が飲み交わし、オトウを受け渡します。

④ 花見



当番のニワの女性（かつては念仏講の女性）が集まり、オビシヤの花見を唄います

⑤ 直会



高津自治会館へと移動し、直会を行います。

的・弓・矢



高津新田のカラスビシヤ

① 式典



諏訪神社の本殿前で、氏子総代を始め、当番や世話人等が集まり、式典が執り行われます。

② 弓射行事1



まず氏子総代が弓を射ます。その後、来賓や氏子等参加者全員が弓を射ます。1人3本程度、矢を放ちます。

③ 弓射神事2



弓射の最後に当番が矢を手にとって的のカラスの目の部分を突き刺します。

④ 直会



高津新田公会堂へ移動し、直会を行います。

⑤ オトウワタシ



世話人を挟んで、新旧の当番が座ります。お神酒をのみ、頭を塩をつけた大根でこすった後、次の当番の襟へオトウを差し込みます。

⑥ ハッセ



午後からは女性の席となります。この席の最後にハッセという祝い唄が唄われます。